

『江島縁起』 悪龍教化譚の典拠表現

田 中 亜 美

Abstract

一、はじめに

『江島縁起』は、江の島の誕生と僧侶たちの来島を説くもので、絵巻を含む諸本は大きく真名本・仮名本に分けられる。いま真名本に則り概略を示すと、

- (Ⅰ) 弁才天の五頭龍教化と江島明神・龍口明神の成立
- (Ⅱ) 役行者の伝と来島
- (Ⅲ) 泰澄、龍口明神に法施を行い、また江の島に来島する
- (Ⅳ) 道智、龍女の怒りを買う
- (Ⅴ) 空海の伝と来島
- (Ⅵ) 円仁の伝と来島
- (Ⅶ) 安然の来島と『安然和尚記』『安然秘所記』
- (Ⅷ) 皇慶による縁起の撰述
- (Ⅸ) 書承の経緯

となる。仮名本には(Ⅶ)の『安然秘所記』から(Ⅸ)までがなく、代わりに良真^①による下宮創建が語られる。

筆者はこれまでに、縁起の冒頭にあたる(Ⅰ)の悪龍教化譚について、観音菩薩が毘那耶迦女の姿を取ることで、愛欲を抱いた毘那耶迦王を教化し悪行を止めさせたという説話から着想を得たものであることを明らかにした^②。

また、縁起で五頭龍を指して用いられる「毒龍」の語に着目し、この語が仏典から漢詩文に広まり、①毒性を持つ龍、②土地や人に損害を与える龍、③

悪心を持つ龍という要素のうちいずれか、または複数を持つものに対し用いられてきたことを検証した^③。

縁起諸本の詳細と、縁起を対象とした研究については、前稿で整理したため、ここでは簡略に示す^④。

まず、現存する縁起の諸本には、主に以下のものがある。

『真名本系統』

- A 『相州津村江之島弁財天縁起』漢文 一冊 神奈川県立金沢文庫保管
- B 『江島縁起』漢文 一卷 江島神社蔵

『仮名本系統』

- C 『江島五卷縁起』(絵巻) 漢字かな交じり 五卷 岩本楼蔵
- D 『江島縁起』(絵巻) 漢字かな交じり 五卷 江島神社蔵
- E 『相州得瑞島上之宮縁起』漢字かな交じり 一卷 江島神社蔵

『他の文献に含まれる江島縁起』^⑤

- F 光宗『溪風拾葉集』卷三十七「弁財天縁起」江島縁起事
- G 日澄『日蓮聖人註画讃』

小稿では主に、基本的な内容を完備し、目立った錯簡や欠落のないBを取り上げる。奥書によれば、応永二〇年(一四一三)に鏡麗が書写したものを、享祿四年(一五三二)に乗海が写したとあるが、その後に「云々」とあることから、その後さらに転写が行われたものと考えられる。なおAには大幅な落丁・乱丁があるが、残っている部分はBとほぼ同文で、奥書には元亨三年(一二三三)とある。この写本年代が正しければ、真名本の本文は鎌倉時代末

期には成立していたといえる。

次に、江島縁起の悪龍教化譚を対象とした主な先行研究を確認したい。呉文炳は五頭龍の物語について、八岐大蛇の神話と同じ類型だと指摘し、「鎌倉文化の復興期に於ける日本民族精神の復興」、「素戔鳴命の英雄主義の復興」を意味するものとした⁽⁶⁾。福島金治は、江島縁起の内容に表れた地理認識を、江の島周辺の実地の地形と比較して分析した。そして、縁起に描かれる五頭龍の暴虐は、かつて暴れ川であった柏尾川の氾濫が表現されたものと指摘する⁽⁷⁾。鳥谷武史は、江島縁起の悪龍教化譚を作ったのは、走湯山を拠点としていた修験者たちであろうと推定する。また、縁起において、江の島が造られる場面に「水火雷電」なる神が登場することに着目し、弁才天を本地とする「見る目」と龍神、「火の雷」および「水の雷」が協力して三宅島を創造する『三宅記』との共通性を指摘する。その上で、江の島誕生の伝説は、『三宅記』と同様に、海底噴火を下敷きにしたものであろうと推定する⁽⁸⁾。

以上の先行研究においては、縁起が語る内容や弁才天信仰の性質、江の島出現の物語が持つ意味などが論じられている。しかし、縁起本文の表現そのものを詳細に分析した研究は未だ十分に行われていない。縁起に用いられた表現・語句を分析し、その典拠を明らかにすることで、縁起が依拠した資料から、縁起が成立した背景の解明に近づくことができよう。

小稿では、『江島縁起』冒頭の悪龍教化譚に用いられた表現の典拠から、縁起の成立環境の一端を解明したい。まず、五頭龍が国土に災害をなす箇所について、『道賢上人冥途記』における太政威徳天に関する記述と比較し、『道賢上人冥途記』の表現が『江島縁起』に取り入れられた可能性を指摘したい。次いで、五頭龍に家族を食われ嘆き悲しむ人々の描写には、白居易の新樂府「新豊折臂翁」と、これを引いて八岐大蛇の暴虐を語る『平家物語』剣巻の表現とが同時に用いられていることを検証する。最後に、逗子・沼間の法勝寺に伝来した『天童山正覚寺観音菩薩縁起』と『江島縁起』の内容の類似に言及し、悪龍教化の伝承が江の島・逗子を含む一帯の地域で共有されていた可能性を示したい。

二、真名本『江島縁起』の悪龍教化譚

まずは、諸本Bに掲げた真名本『江島縁起』から、冒頭の悪龍教化譚を掲げる⁽⁹⁾。

①『江島縁起』(I)

大日本国東海道相模国江島者、天龍八部之所造、弁才天女之霊体也。謹檢_レ靈島先起_レ者、房藏相_三箇国之境、鎌倉与_三海月郡之間、有_三四十里之湖水。号_三深沢。其湖水為_レ体、水滔々四山逆_レ影、雲霧鎮埋_レ谿、豺狼滿_レ岡。若人到時者、黑風払_レ梢、白浪咽_レ岸、而間人跡更絶_三湖辺。爰有_三猛惡之龍。即五頭一身之龍王也。屢卜_三湖水為_レ栖。自_三神武天皇御宇。至于人王十一代垂仁天皇之御宇。七百余年之間、(イ)彼惡龍伴_三風伯・鬼魅・山神等。逕_三国土為_レ災害。所謂崩_レ山出_レ洪水、損_レ物成_三病痼乱逆。第十二代景行天皇治六十年之間、惡龍於_三東国常降_三火雨。依_レ之国民以_三石窟為_三人屋。(ロ)二十一代安康天皇御宇、龍鬼託_三円大臣。令_レ成_三惡事。廿六代武烈天皇之御宇、龍鬼託_三金村大臣。令_レ成_三乱逆。此時五頭龍初出_三現湖水之南山之谷津村水門、初噉_三食人兒。仍時人所名_三初噉沢。西岳号_三江野。此沢者湖水之水門、南海之入江也。(ハ)谷前有_三女長者。生_三三十六人之子、為_三毒龍。被_三噉食_二乎。於_レ茲長者咽_三愁苦之思。辞_三旧宅。遷_三住西里。名_三長者塚。惡龍漸遍_三村里。吞_三喰人兒之間、邑里之人民怖畏捨_三離住所、移_三越他所。世人此所云_三子死越。龍噉_レ人既及_三八箇国。(ニ)被_レ吞親者子悲、被_レ吞_レ子者親悲、村南村北哭声不_レ絶。兒別_レ母、夫別_レ妻。爰八箇国之貴賤衆人相議、以_レ兒周_三備毒龍之贊。(ホ)凡貴賤男女啼哭之声不_レ断絶。於_レ茲人王三十代欽明天皇第十三年壬申自_三四月十二日戊剋、至_三同廿三日辰剋、当_三江野之南海、湖水之水門、雲霞暗_三蔽海上。日夜大地振動、天女雲上顯現、童子左右侍立。諸天・龍神・水火雷電・山神・鬼魅・夜叉・羅刹、(ヘ)從_三雲上降_三盤石、自_三海底拳_三沙石、電光耀_レ天、火焰交_三雜白浪。同廿三日及_三辰剋、雲去霞散、見_三海上二頭_三出島山。蒼波之間、神現山新也。十二鵜降居_三島上。(ト)依_レ之忽云_三鵜来島。々上天女降、形貌殊妙耀_三麗質於金窟。是即弁

才_二天女之応作、無熱池龍王之第三之娘也。於_レ茲五頭龍、見_二是天女之麗質、為_レ通志於天女、凌波渡_レ島、到_二天女所_一卜欲念。天女答云、我有_二本誓、愍念有情。汝無慚愧、横害於生命。形与_レ心共我不_二相似、更不_レ可通。龍言、我随_二教命、自今後永停凶害心、禁断殺生。願垂哀愍、令_二我得遂宿念。于時天女肯。爰龍随_二順天女教誡、發誓向_レ南成_レ山。世人是名_二龍口山、又号_二子死方明神。〔子〕弁才天先以_二方便之力、為_レ降_二伏龍之猛惡、救_中護衆生上故、所_二化作_二島也。垂_二權迹_二天女也。是号_二江島明神。〔

鎌倉郡と海月（久良岐）郡の境に深沢という湖があり、一身五頭の悪龍が棲んで人々を苦しめていた。神武天皇から垂仁天皇の代まで七百余年、龍は風伯・鬼神・山神等を伴い国土に様々な災いをもたらす。景行天皇の代には東国に火の雨を降らせたので、人々は石窟に住んだ。安康天皇の代には葛城円に、武烈天皇の代には大伴金村に、龍はそれぞれ憑いて乱逆を起こさせる。また龍は人を取って食うようになり、その害は八箇国に及んだ。人々は話し合い、龍に生贄を出すことにする。欽明天皇十三年、弁才天が眷属とともに現れ、海上に島を造る。島に降り立ったこの弁才天を見て、龍は愛欲を起すが、弁才天は拒絶する。龍が悪心を止め、仏法を護持することを誓うと、弁才天は龍を受け入れ、龍は龍口山となった。これが子死方明神（龍口明神）であり、弁才天は江島明神である。

この悪龍教化譚によって、江の島の誕生と江島明神、また江の島の対岸に位置する龍口明神の由来が説かれる。龍口明神社は、もともと藤沢市片瀬の龍口寺の脇に位置していたが、昭和五三年（一九七八）に鎌倉市腰越に遷座した。

一読してわかるように、何らかの資料を明確に引用するような箇所は見えない。また記述は仮名本と比較しても簡潔で、装飾的な表現もあまりない。しかし、文章を細かく見てみると、中国・日本の文学に典拠を持つ表現が散見される。漢詩文由来の表現の典拠については、別に機会を設け、ここでは主に、日本文学からの影響を考えてみたい。

三、『道賢上人冥途記』との関連——太政威徳天と五頭龍——

前項で掲げた①のうち、まず、

（イ）彼悪龍伴_二風伯・鬼魅・山神等_一逕_二国土_一為_二災害。所謂崩_レ山出_二洪水、損_レ物成_二病痢乱逆_一。

に注目したい。五頭龍の悪行を示すこの記述には、『道賢上人冥途記』と共通の語句が多くみられる。

僧日藏による冥界巡りの物語である『道賢上人冥途記』には、『扶桑略記』卷二十五・天慶四年（九四一）三月条に引用されたものと、『日藏夢記』と通称される『北野文叢』卷十一所収のものなどがある。^① 怨みを抱いて大宰府で没した菅原道真が、死後に太政威徳天となり、眷属たちを率いて国土に災いをもたらす箇所、また太政威徳天の第三の使者である火雷火毒氣王を中心とした眷属たちがさまざまな災害を起こす箇所は、以下のように語られる。なお、ここには該当箇所のみを略出したが、テクストの全体量は、③が②よりも大幅に長い。

②『扶桑略記』卷二十五・天慶四年三月条

道賢上人冥途記云、弟子道賢「今名_二日藏_一」、以_二去延喜十六年春二月、年十有_二二、初入_二此金峯山_一。即於_二発心門椿山寺、剃髮改_二衣、断_二絶鹽穀、籠山六年。爰得_二風伝_一云、母氏頻沉_二病痢、恋泣不_レ休云々。（中略）然而彼所_レ有_二普賢・龍猛等盛流_一布密教。我素愛_二重此教_一故、昔日怨_二心十分之一息也。（中略）（a）其眷属十六万八千毒龍・惡鬼・水火雷電・風伯・雨師・毒害邪神等、遍_二満国土_一、行_二大災害_一。（中略）又自余眷属勢力、与_二彼火雷王_一同。或（b）崩_二山振_二地、壊_二城損_二物、或吹_二暴風_一降_二疾雨、人物併損害。或行_二疾病夭死之疾、或令_レ発_二謀反乱逆之心_一。

③『北野文叢』卷十一所収『道賢上人冥途記』（日藏夢記）

弟子「道賢、今名_二日藏_一」、以_二去延喜十六年春二月、年十有_二二、初入_二此金峯山_一。即於_二発心門椿山寺、剃髮出家、断_二絶鹽穀、籠山六年。爰得_二風伝_一云、母氏頻沉_二病痢、悲泣不_レ休云々。（中略）而彼所有_二普賢・龍猛等盛流_一布密教。我素愛_二重此教_一故、昔怨_二心十分之一息也。（中略）即（c）

与_二其眷属十六万八千毒龍・惡鬼・水火雷電・風伯・雨師・毒害邪神等_一、遍_二滿土_一、行_二大災害_一。(中略)又自余眷属勢与_二彼火雷王_一其数難_レ計。或

(d) 崩_レ山振_レ地、壞_レ城損_レ物、或吹_二暴風_一降_二疾雨_一、人物併_レ損害。或行_二疾病火死之病_一、或令_二戒者_一發_二乱逆之心_一、或令_二大人_一條_二嘲弄之乱_一。

(イ) の前半「伴_二風伯・鬼魅・山神等_一逕_二国土_一為_二災害_一」と、②の(a)「与_二其眷属十六万八千毒龍・惡鬼・水火雷電・風伯・雨師・毒害邪神等_一遍_二滿国土_一、行_二大災害_一」及び、ほぼ同文である③の(c)を照らし合わせてみると、眷属のうち一致するのは「風伯」のみであるが、国土を巡り災害をなすという箇所は、よく類似している。

また、(イ)の後半「崩_レ山出_二洪水_一、損_二物成_二病痾乱逆_一」と、②の(b)「崩_レ山振_レ地、壞_レ城損_レ物、或吹_二暴風_一降_二疾雨_一、人物併_レ損害。或行_二疾病天死之疾_一、或令_二發_二謀反乱逆之心_一」及び、それとほぼ同文である③の(d)を比較してみたい。「崩_レ山」「損_レ物」「乱逆」と、短い記述の中に一致する表現が三箇所ある。これらの語句が共通して用いられる例は、管見の限り他に確認できない。「病痾」は(b)(d)にはないが、②③それぞれの三行目に用例が確認できる。

さらに、

(口) 二十一代安康天皇御宇、龍鬼託_二金村大臣_一令_二成_二乱逆_一皇之御宇、龍鬼託_二金村大臣_一令_二成_二惡事_一。廿六代武烈天

に着目したい。『江島縁起』で五頭龍のなす悪行は、自ら災害を起こすだけでなく、人に憑りついて乱逆を起こせるといふ形でも表される。五頭龍に憑かれて悪事をなした人物として、葛城円・大伴金村の二名が選ばれた要因は明らかではないが、(口)の「令_二成_二乱逆_一」は、②(b)の「令_二發_二謀反乱逆之心_一」、あるいは③(c)の「令_二戒者_一發_二乱逆之心_一」を踏まえたのではなかろうか。

以上のように、『江島縁起』における、五頭龍の悪行を示す記述には、『道賢上人冥途記』と類似する表現が集中している。

さらに、縁起中の他の箇所にも『道賢上人冥途記』との関連が指摘できる。④に示すのは、概略(Ⅲ)の一部にあたる、泰澄が龍口明神で法樂を施与し、

明神の託宣を受ける場面である。

④『江島縁起』(Ⅲ)

元正天皇養老七年癸亥自_二春三月_一泰澄大師住_二江島_一、誦_二誦大乘經_一、念_二誦陀羅尼_一、專_二一心精進_一、每日乘_二船詣_二龍口山_一施_二与_二法樂_一、祈_二離業証_一果。而於龍口山之間有_二三池_一。大師每日為_二法樂_一。一池書_二写光明真言_一入_二池底_一。是名_二光明真言池_一。一池書_二阿弥陀仏六字名号_一入_二池中_一。是号_二阿弥陀池_一。如是施_二与_二法樂_一經_二日月之間_一、明神謁_二对大師言_一、我受_二菩薩之法施_一、洗_二除三熱之悩垢_一、獲得宿明智。既知_二旧德之先处_一也。豈生_二惡心_一乎。雖然国土逆人出来者、斬_二頸懸_二我前_一。是非_二昔日之凶執_一、屢静_二海内之凶賊_一、為_二除_二逆人於万里_一。(後略)。

養老七年(七三三)、泰澄は江の島で經典や陀羅尼を誦するとともに、毎日船で龍口山を訪れ、離業証果のため龍口明神に法樂を施与する。そうしているうちに龍口明神が現れ、自分はすでに悪心を持っていないことを告げる。さらに、国土守護のため、反逆者の首を社前に懸けよと言う。

この話は、龍口が刑場であったことの由来として語られ、「はじめに」のGに示した『日蓮聖人註画讃』でも、日蓮が龍口で斬首されそうになるも、江の島の方から飛来した光によって刀が折れ、難を逃れるという、いわゆる龍口法難の場面に引かれる。

④で龍口明神が言った「昔日之凶執」は、②における太政威徳天の「昔日怨心」、③では「昔怨心」と対応する。

なお『道賢上人冥途記』は『元亨釈書』卷一八・北野天満天神の条にも引用される。②③と比較するとかなり簡略化されていて(イ)(口)に対応する記述は見られないが、ある表現に注目したい。

⑤『元亨釈書』卷一所引『道賢上人冥途記』

我又愛_二重仏教_一、故不_二成_二巨害_一。但我十六万八千諸眷属、暴惡鬼神等、随_二处興_二災_一。我尚難_二禁_一。我受_二神慰_一、味_二法樂_一故、昔日怨懟少息耳。

太政威徳天が「神慰」「法樂」を受けて怨みを和らげたとする記述は、④の傍線部「我受_二菩薩之法施_一、洗_二除三熱之悩垢_一、獲得宿明智。既知_二旧德之先处_一也。豈生_二惡心_一乎」と類似する。この点のみをもって縁起の撰述者が

⑤を参照していたと断定することはできないが、一つの可能性を指摘しておきたい。

さらに、『江島縁起』の概略(Ⅱ)に示した役行者来島の記事には、次のような表現がある。

⑥『江島縁起』(Ⅱ)

如是致請七日專念誦不動明王咒。而及第七日後夜時分、窟中香雲自然周遍、光明照耀。

『道賢上人冥途記』で太政威徳天が現れる前に、⑥の傍線部と類似の表現が確認できる。

⑦『扶桑略記』卷二十五・天慶四年

于時有自然光明照耀、其光五色。菩薩曰、日本太政威徳天来也。

これもまた、『道賢上人冥途記』が、縁起の撰述者によって参照されたことを示す傍証といえよう。

以上、縁起と『道賢上人冥途記』との関連を、類似・共通する語句を挙げて検討した。冒頭の悪龍教化譚における「伴風伯・鬼魅・山神等逕国土為災害」と「崩山出洪水、損物成病痼乱逆」の箇所には、『道賢上人冥途記』と共通する語句が集中してみられる。また、「昔日之凶執」について先述したように、弁才天に教化されて龍口明神となり、さらにその後泰澄の法衆によって苦を除かれる五頭龍と、菅原道真と太政威徳天とは、悪心によって人々に害をなすが、仏法により教化されて善神となるという共通の来歴を持つ。様々な悪神たちを眷属として従えるという点でも、両者は共通している。五頭龍と龍口明神の姿を描く上で、太政威徳天とその眷属たちがモデルの一つになったのではなかろうか。

なお、内容の面で直接関係があるわけではないが、『本朝文粹』卷一四所収「宇田院為河原院左大臣没後修諷誦文」のなかで、源融の亡霊が語ったという内容にみえる「昔日之愛執」は、④の「昔日之凶執」と表現が類似している。

⑧紀在昌「宇田院為河原院左大臣没後修諷誦文」(『本朝文粹』卷十四)

而去月二十五日、大臣亡霊、忽託宮人申云、我在世之間、殺生為事。

『江島縁起』悪龍教化譚の典拠表現

依其業報、墮於惡趣。一日之中、三度受苦。劍林置身、鉄杵碎骨。楚毒至痛、不可具言。唯其答掠之余、拷案之隙、因昔日之愛執、時来息此院。

先に掲げた②の「昔日怨心」や③の「昔怨心」よりも、「昔日之凶執」に近い表現である。なお「凶執」の語は、管見の限り、中国・日本の中世以前の仏典や文学作品において、他に用例が見えない。縁起には他にも『本朝文粹』と共通する語句が散見されることから、『本朝文粹』は縁起の撰述者によって参照されたと考えられる。④の「昔日之凶執」は、五頭龍および龍口明神の描写の主な典拠を『道賢上人冥途記』としつつ、同時に『本朝文粹』の表現が参照された箇所と推測できる。このような、同時に複数の典拠を踏まえた思しき箇所として、より明確なものを、次節で検証したい。

四、『平家物語』および新樂府「新豊折臂翁」との関連

―八岐大蛇と五頭龍―

前節では、縁起の悪龍教化譚から、五頭龍の悪行を記す表現についてみてきた。今度は、五頭龍の暴威に苦しむ人々の描写(ハ)(ニ)(ホ)に注目したい。

(ハ) 谷前有女長者。生十六人之子、為毒龍被噉食乎。於茲長者咽愁苦之思、辞旧宅遷住西里。名長者塚。

(ニ) 被吞親者子悲、被吞子者親悲、村南村北哭声不絶。兒別母、夫別妻。

(ホ) 凡貴賤男女啼哭之声不絶。

(ハ)によると、五頭龍は女長者の十六人の子供たちをみな食べてしまう。悲しんだ長者は住居を捨てて西の里に移住したという、「長者塚」の由来である。

兄弟姉妹を相次いで吞んでしまう多頭の龍蛇という要素から想起されるのは、やはり八岐大蛇であろう。「はじめに」で触れたように、既に呉文炳が『江島考』において、縁起と八岐大蛇伝承を、同じ類型にあると指摘している。改めて『江島縁起』の文章を『日本書紀』と比較してみると、話の類型だけ

でなく、表現の面でも関連が指摘できる。

⑨『日本書紀』巻一

是時素戔鳴尊、自天而降到於出雲國簸之川上。時聞川上有啼哭之声。(中略)所以哭者、往時吾兒有八箇少女、毎年為八岐大蛇所吞。今此少童且臨被吞。無由脱免。故以哀傷。

⑨は『日本書紀』における、素戔鳴尊の八岐大蛇退治の記事である。素戔鳴命が出雲の簸川の上流に下ったとき、「啼哭之声」が聞こえたという。(ホ)に見られる「啼哭之声」は、ここから取られた可能性がある。ただし、『日本書紀』の語句と明らかに一致する箇所は、管見の限りこれを除いて確認できない。

ここで着目したいのが、『平家物語』剣巻に取り入れられた八岐大蛇の物語である。⑨に引いた素戔鳴の八岐大蛇退治を踏まえるものであるが、⑨そのままの表現ではなく、様々な表現が加えられている。

この中に、縁起の(二)と極めて近い記述が確認できる。以下、諸本から該当箇所を掲げる。

⑩『平家物語』延慶本 卷六本・靈剣等事

昔素戔鳥尊、出雲國へ被流給タリケルニ、其國簸河上山至給、哭泣スル音不絶。音付テ尋行見給、一人老翁、一人老嫗アリ。中小女置テカキ撫ナク。尊、汝等ハ何ナル事ヲ嘆泣ソト問給ケレハ、老翁答云、我ハ昔此國神門郡アリシ長者也、今ハ国津神ト成テ年久。其名脚摩乳云、妻ヲハ手摩乳号。此ノ小女即我女子也、奇稲姫名ク。又曾波姫トモ申。此山奥ニ八岐羽々ト云大蛇アリ、年々人飲。親被飲者子悲、子ヲ被飲者親悲。故村南村北哭スル音不絶。我ハ人女アリキ、年々被飲只此女人残レリ、今又被飲ナント云、始ノ如又哭。

⑪『平家物語』高野本 卷十一・剣

むかし尊、出雲國簸河上にくだり給ひしとき、国津の神に足なづち手なづちとて夫婦神おはします。其子に端正の娘あり、稲田姫と号す。親子三人泣きあたり。尊、「いかに」と問ひ給へば、こたへ申していはいはく、「われに娘八人ありき。みな大蛇のためにのまれぬ。今一人のこるとこ

ろの少女、又のまれんとす。件の大蛇は尾頭共に八つあり。おのおの八つのみね、八つの谷にはひはびこれり。靈樹異木せなかにおひたり。幾千年をへたりといふ事を知らず。まなこは日月の光のごとし。年々に人をのむ。親のまるる者は子かなしみ、子のまるる者は親かなしみ、村南村北に哭する声たえず」とぞ申しける。

⑫『平家物語』長門本 卷十九・剣

素戔鳥尊、出雲國へ流され給たりけるに、其國の簸の川上の山にいたり給時、村南村北に哭する声たえず、これを恠しみて尋行給ふに、一人の老翁老婆あり、(中略)尾頭ともに八あり、せなかの上には苔むしてもろの木生ひたり、眼は日月の光のごとし、年々人をのむ事幾千万といふ事をしらず、是に由て村南村北に哭する音絶ざりけり、

⑬『平家物語』百二十句本 卷十一・剣

年々に人を食す。親吞まれて子かなしみ、子吞まれて親嘆く。

⑭『源平盛衰記』卷四十四・神鏡神璽都入並三種宝剣事

この河上の山に大蛇有り。年々に人を吞む。親を食はれ、子を吞まれ、親子互に相嘆きて村南村北に愁の声絶ゆる事なし。

これらは、三種の神器の一つである草薙剣の来歴を記すもので、いずれも⑨の八岐大蛇退治を踏まえながら、様々な文飾を加えている。⑩⑭の傍線部は、いずれも(二)と類似するが、特に近いのは(二)における「被吞親者子悲、被吞子者親悲」に相当する箇所と、「村南村北哭声不絶」に相当する箇所の両方をもつ⑩⑪である。⑫⑬にはそれぞれ片方しかなく、⑫は両方に相当する箇所を持つものの、やや表現が(二)から離れている。いずれにせよ(二)の「被吞親者子悲、被吞子者親悲、村南村北哭声不絶」は、系統の特定には至らないものの、『平家物語』もしくはその材料となつたテクストを引くものであることが推測できる。

ところで、(二)の「児別母、夫別妻」は、『平家物語』の諸本にはみられない。この部分は『江島縁起』独自の表現なのであろうか。実は、先に比較した『平家物語』の記述には出典がある。⑩の「村南村北哭声不絶」は、白居易の新樂府「新豊折臂翁」を典拠とすることが、すでに横井孝によつ

て指摘されている。⁽¹⁵⁾

⑮ 白居易「新豊折臂翁」(『白氏文集』卷三・新樂府)

無_レ何天宝大徴_レ兵、戸有三_二丁点_一。点得_レ驅將何処去、五月万里雲南行。聞道雲南有_二瀘水_一、椒花落時瘴煙起。大軍徒涉水如_レ湯、未_レ過十人二三死。村南村北哭聲哀、兒別_二爺娘_一、夫別_レ妻。皆云前後征_二蠻者_一、千万人行無_二一回_一。

⑮「新豊折臂翁」は、右肘の折れた八十八歳の老翁が、自らその理由を語るというものである。楊国忠が権力を握っていた唐・天宝の時代、若い頃の翁は自ら腕を叩き折って雲南出兵のための徴兵を逃れる。彼が伝え聞いた雲南の様子の中では、瀘水には瘴煙が起こり、渡ろうとして死ぬ者があることが語られる。そして、家族を失った人々の悲しみが「村南村北哭聲哀、兒別_二爺娘_一、夫別_レ妻」と表現される。(二)の「兒別_レ母、夫別_レ妻」はこの「兒別_二爺娘_一、夫別_レ妻」を元にしたものであろう。「兒別_レ母」とするのは、「夫別_レ妻」との対として、字数を合わせるためであらうか。それでは(二)は⑮「新豊折臂翁」のみを典拠とするかといえ、(二)の「被_レ吞_レ親者子悲、被_レ吞_レ子者親悲」に相当する部分は、⑮には存在しない。

なお、延慶本『平家物語』には、⑩以外にも⑮「新豊折臂翁」の「村南村北」を典拠とする表現がある。

⑯ 『平家物語』延慶本 第三末・於日吉社如法經轉読スル事

一天逆乱、四方合戦、士卒塗_二肝腦於土地_一、民庶曝_二骨骸於原野_一。コト不_レ可_二勝計_一。村南村北哭泣声不_レ絶。

⑰ 『平家物語』延慶本 第三末・雲南瀘水事付折臂翁事

昔天宝兵徴。驅向何処ヤル。五月万里雲南行。彼雲南瀘水アリ。大軍歩ヨリ渡時、水湯レ如。未戦ワザルニ、十人二三死。村南村北哭スル声悲シ。兒ハ娜嬢別、夫妻子別。前後蛮ニ征モノ、千万一人モ返ラズ。(中略) 一枝ヲラズハイカニサクラハナヤソチアマリノ春アワマシ 平家今度シカルベキ侍共、カスヲツクシテ下ツカワス。其外諸国ヨリモ驅向タル兵、幾千万云事シラス。行再帰ラス、谷一ウメテケリ。サレハ、彼雲南万里瀘水違サリケル物ヤト哀也。

『江島縁起』 悪龍教化譚の典拠表現

⑯は「村南村北哭泣声不_レ絶」と、⑩及び(二)に近い形をとるが、その後「兒別_レ」が続かない。文脈の上では⑮「新豊折臂翁」とそれほど関係がなく、⑮の表現が戦の惨状を示す定型表現のようになっていたことが窺える。⑰は表題「雲南瀘水事付折臂翁事」にも表れているように、「新豊折臂翁」全体の内容を引き、また出典の⑮における「村南村北哭聲哀」に近い「村南村北哭スル声悲シ」の形をとる。この箇所は、平家による遠征を雲南遠征に重ね、その過酷さを表現するものである。

改めて『江島縁起』の傍線部(二)「被_レ吞_レ親者子悲、被_レ吞_レ子者親悲、村南村北哭聲不_レ絶。兒別_レ母、夫別_レ妻」の典拠を検討してみよう。まず「被_レ吞_レ親者子悲、被_レ吞_レ子者親悲」は、⑮「新豊折臂翁」ではなく、⑩⑪のような『平家物語』またはその原資料からの引用と推測される。これに続く「村南村北哭聲不_レ絶」の部分も、「哭聲哀」ではなく「哭聲不_レ絶」であることを考えると、これも⑮「新豊折臂翁」から直接取ったのではなく『平家物語』からの引用であらう。しかし、最後の「兒別_レ母、夫別_レ妻」の部分は、『平家物語』において八岐大蛇のことを記す⑩⑪にはない。この部分は⑮「新豊折臂翁」からの引用といえる。もちろん『平家物語』にも「新豊折臂翁」の全体を引く⑰が存在することを考えれば、縁起撰述者が直接参照したのは『平家物語』かもしれない。しかしその場合も、『平家物語』が全体を引く「新豊折臂翁」の内容を、十分に認識した上で引用していることになる。いずれにせよ、真名本『江島縁起』の(二)は、『平家物語』の八岐大蛇退治神話と、そこに引用された白居易の「新豊折臂翁」を同時に踏まえた記述であるといえる。

このことは、縁起撰述者のどのような意図を表すものだろうか。先に触れたように、(末)の「啼哭之声不_二断絶_一」には、⑨『日本書紀』の「川上有_二啼哭之声_一」との関連が窺える。「不_二断絶_一」とするのは、(二)の「村南村北哭聲不_レ絶」と同様、『平家物語』からの影響とも考えられる。

縁起撰述者は、『日本書紀』や『平家物語』で語られる八岐大蛇のイメージを借りて、子供たちを呑み食らってしまう五頭龍の姿を表現しようとした。それと同時に、新樂府「新豊折臂翁」で描かれた雲南・瀘水に立ちこめ

る瘴気のイメージをも借りて、五頭龍の毒気を表そうとしたのではなかろうか。実際に『江島縁起』の中で、五頭龍は「毒龍」とも記され、龍のもたらす害は「毒」という言葉で表現されることがある。また五頭龍が棲む深沢の様子を、縁起は「水滔々四山逆影、雲霧鎮埋谿」とする。五頭龍自身が雲霧を出すというわけではないにしても、霧深い湖水に「毒龍」が棲む、というイメージは、瀧水の瘴気を想起させたものと考えられる。

なお(八)の「咽愁苦之思」は、『平家物語』そのものの引用ではないが、ある点で縁のある表現だといえる。

⑱ 建保二年(一二二四)五月十二日興福寺衆徒返牒⁽¹⁸⁾

伝聞、此事之後、暗廻鬱棲之腸、竊咽愁苦之思⁽¹⁹⁾。

⑱は、比叡山勢力による焼き討ちに怒った園城寺が、東大寺・興福寺等に協力を求める牒状を送り、その返答として興福寺から送られたものである。園城寺からの牒状と共に、延慶本『平家物語』巻二「平家三井寺焼払事」「南都焼払事」にこの書状から語句が引用されているが、傍線部は引用されていない。したがって(八)の表現は、『平家物語』を介した引用とはいえない。もしこの返牒そのもの、またはその一節がある程度流布していたならば、縁起撰述者が参考とした可能性はある。

『平家物語』に描かれた八岐大蛇と、『江島縁起』との関連を示す箇所は、他にもある。①の(へ)「從雲上降盤石、自海底拳沙石」において「雲上」「海底」が対となっているが、これは『土佐日記』や、『平家物語』に確認できる。そのうち『平家物語』での用例(②③)は、安徳天皇の入水の場合である。

⑲ 『土佐日記』

このあひだに、雲の上も、海の底も、同じごとくになむありける。

⑳ 『平家物語』延慶本 第六本・檀浦合戦事

雲上龍降海底鱗成給。

㉑ 『平家物語』高野本 卷十一・先帝身投

雲上の竜くだって海底の魚となり給ふ。

『平家物語』では、安徳天皇と草薙剣が壇ノ浦に沈んだことを、本来龍の世

界のものであった剣が取り返されたのだと説明する。⁽¹⁷⁾⑨に引いた神話において、草薙剣は素戔鳴命が切った八岐大蛇の尾から出現する。死んだ八岐大蛇は剣への執心から、安徳天皇としてこの世に現れ、剣と共に海中に沈むことで、龍宮に剣を取り戻したのだ、という。⁽¹⁸⁾(へ)については、「雲上」「海底」の語句のみを以て断定することは難しいが、②③といった、八岐大蛇に関する箇所二語を対とした用例があることを考えると、やはり『平家物語』と縁起の関連を示す傍証の一つといえよう。

また、『白氏文集』に典拠を持つと考えられる表現は、「新豊折臂翁」を引く(二) 以外にもある。

(ト) 依之忽云鵜来島。々上天女降、形貌殊妙耀麗質於金窟。是即弁才天女之応作、無熱池龍王之第三之娘也。於茲五頭龍、見是天女之麗質、為通志於天女、凌波渡島、到天女所卜欲念。

天女に対して用いられている「麗質」の用例としては、「長恨歌」の次の一節がまず挙げられよう。

②② 白居易「長恨歌」(『白氏文集』巻二二)

天生麗質難自棄、一朝選在君王側。

楊貴妃の美しさを示す箇所である。『長恨歌』は周知のとおり、日本文学に多大な影響を与えている。「麗質」の語を用いる際、改めて『白氏文集』を参照したわけでもなかっただろうが、「新豊折臂翁」の用例とあわせて考えると、縁起の撰述者が『白氏文集』の表現を意識的にも、また無意識にも取り入れていたのであろう。

五、「垂権迹」の用例

①に掲げた『江島縁起』冒頭の悪龍教化譚は、次のように結ばれる。

(チ) 弁才天先以方便之力、為降伏龍之猛惡、救護衆生故、所化作一島也。垂権迹天女也。是号江島明神。

江の島は弁才天が衆生を救護するために、方便の力を以て化作した島であるとし、弁才天が天女として現れたことを「垂権迹」と表現する。「垂権迹」および「垂権迹」という表現は、経典や中国・朝鮮の仏教典籍には

みられない¹⁹が、日本には多くの用例がある。その最も知られた例は、八幡神の託宣中に見える偈文であろう。

三善為康『拾遺往生伝』巻上・開成皇子の条には、八幡神が開成皇子に夢中で告げた偈文が見える。

②③ 『拾遺往生伝』巻上・開成皇子

皇子欲_レ遂_二師願_一、維得_二金水_一、祈_二請_二三宝_一、限_二以_二七日_一。第七日曉、夢見_下有_二一人_一、容儀無双、正冠_二衮衣_一、来_レ献_二金丸_一之_レ。皇子_二拝納_一問曰、公_レ為_二誰何_一。公_レ以_レ偈答曰、得道来_レ不_レ動_二法性_一、自_二八正道_一垂_二權跡_一、皆得_レ解_二脱苦衆生_一、故号_二八幡大菩薩_一。夢覺見_レ之、案之上有_二其金凡_一、輪三寸、長七寸。師である勝尾寺の善仲・善算が発願した、金字『大般若経』書写を果たすため、金泥を得ようと祈った開成皇子の夢に、立派な人物が現れて金を授ける。皇子がその人物に誰なのかたずねたところ、「得道来_レ不_レ動_二法性_一、自_二八正道_一垂_二權跡_一、皆得_レ解_二脱苦衆生_一、故号_二八幡大菩薩_一」の偈をもつて答える。この説話は多くの資料に見られ、偈文も共に引かれる。

②④ 『諸寺縁起集』所収「弥勒寺本願大師善仲善算縁起」

于_レ是皇子為_二一聖付属_一、執_二行_二家造_一、營_二堂舎_一。為_二一門長者_一、衆人共許_レ之。第一座主是也。抑依_二受戒之次_一、密語之約、為_二写_二経_一而向_二天道_一祈_二請_二金水_一、滿_二七日_一曉、夢見_二容儀美麗衣冠之人_一。向_レ吾而立告、為_二写経助成_一、欲_レ奉_二加金丸_一。則舒_二右手_一持_二袋青綿之物_一受_二与_一是。即長跪捧_二一手_一拜領。然後問云、君_レ為_二誰人_一。即以_レ偈答云、得道来_レ不_レ動_二法性_一、自_二八正道_一垂_二權跡_一、皆得_レ解_二脱苦衆生_一、故号_二八幡大菩薩_一。〔頌後夢中自念_二八正道垂跡_一、故八幡申歟〕。

②⑤ 『宝物集』巻五

皇子、夢の中に歡喜の思ひをなして、「いか成人の、我願をば満て給ひつるぞ」と申給ひければ、七言の偈を結びてぞこたへ給ひける。

得道来_レ不_レ動_二法性_一 自_二八正道_一垂_二權跡_一 皆得_レ解_二脱苦衆生_一 故号_二八幡大菩薩_一

となへて、かきけすようにうせ給ひぬ。

一三世紀末から一四世紀初頭にかけて、宇佐八幡宮の僧、神眸が著した『八

『江島縁起』悪龍教化譚の典拠表現

幡宇佐宮御託宣集』によれば、この偈文は神護景雲二年（七六九）の託宣による。『八幡宇佐宮御託宣集』で、この偈文は三箇所に引かれる。²⁰

②⑥ 『八幡宇佐宮御託宣集』巻四

文句第三「釈此文云」、生八子表八正道「文」。神勅云、自_二八正道_一垂_二權跡_一、故号_二八幡大菩薩_一「云々」。

②⑦ 『八幡宇佐宮御託宣集』巻八

景雲二年二月十五日「未刻」、善仲乘_二草座_一而昇_二青天_一訖。生年六十一也。同三年七月十五日「酉時」、善算無言而行法如_二先聖_一而歿。生年六十二也。其後開成皇子以_二一聖付属_一、執_二行_二一寺造營_一。不_レ忘_二受戒之次_一、為_二遂_二写経之願功_一、向_二天道_一祈_二請_二金水_一、経_二一七日夜_一、垂_二滿_二七日_一曉、容儀美麗衣冠之人、来_レ而告言、為_二写経助成_一、欲_レ奉_二加金丸_一。右手_二持_二囊青綿之物_一。於是令_二仰丹祈_一之。倒_二曲_一一身。長跪捧_二二手_一拜領。然後問云、君_レ為_二誰人_一。即以_レ偈答宣、得道来_レ不_レ動_二法性_一、示_二八正道_一垂_二權跡_一、皆得_レ解_二脱苦衆生_一、故号_二八幡大菩薩_一。頌後夢念、自_二八正道垂跡_一、故申_二八幡_一矣。

②⑧ 『八幡宇佐宮御託宣集』巻八

八幡大菩薩、昔_レ為_二出_二飯御禹之聖皇_一、施_二恩波_二於旧服四海之外_一、今_レ為_二入空冥利之太士_一、扇_二德風_二於靡草万民之間_一。故勝尾寺縁起、大菩薩自頌云、得道来_レ不_レ動_二法性_一、自_二八正道_一垂_二權跡_一、皆得_レ解_二脱救衆生_一、故号_二八幡大菩薩_一「已上」

以上、八幡神の偈が様々な資料に引かれた例を確認した。ただし、「垂_二權跡_一」は必ずしも八幡神に対してのみ用いられたわけではない。

②⑨ 大江匡房「於安樂寺供養大般若経願文」(『江都督納言願文集』巻三)

以_二此功德_一、先資_二聖廟_一。外是行雲行雨之朝朝暮暮、暫垂_二權跡_一、内則妙覺之巍巍堂堂、宜歸_二寂光_一。

これは②③よりも早い例であり、天神に対し「垂_二權跡_一」を用いている。²¹

③⑩ 「一遍聖絵」

高野大師の御記云、西土之三尊、垂_二權跡_一於馬台、東家之四輩、成_二菩提於安樂_一。

この例では、阿弥陀三尊が聖徳太子の母・聖徳太子・太子の后として日本

に現れたことを示すのに「垂権跡」を用いる。

③①『山家要略記』神宮文庫本 厳神靈応章 日吉山王靈応記第一

止観院纂篠中山王垂迹事

根本中堂神祇祭文曰、山家御記、

纂篠竹林中 方便法伝来 神明垂権迹 人間万世興

③②『溪嵐拾葉集』巻九「大正蔵七十六・五三〇頁上」

一、根本中堂篠竹中山王御垂迹事 中堂神祇祭文云、叢篠竹林中、方便法伝来、神明垂権迹、人間万世興⁽²²⁾。

③①③②は山王権現に對し用いられた例である。

③③『太平記』西源院本 巻十七「山門の牒南都に送る事」⁽²³⁾

牒す。仏法わが邦に伝はつて、七百余年と号す。皇統を祝し、蒼生を益するは、法相円頓の秘蹟、最も勝れたり。神明権跡を垂れて、七千余座と号す。宝祚を鎮めて威光を耀かすは、四所三聖の靈驗、他に異なり。

足利尊氏・直義討伐のため、比叡山から南都に協力を求める牒状の一節である。ここでは国中の神々に対して用いられている。

③④長弁「敬白請於武州惣社六所大明神御宝前書 写紺紙金泥大般若經一部

六百卷 奉三社頭施入三祈天下安全万民快樂志趣発願文事」(「長弁私案抄」)

一宮小野大明神者、大聖文殊垂迹也。三世諸仏成等正覺之智母、釈迦如来成道九代之祖師也。揮般若了達智劍、截衆生結縛之邪魔。駕奮迅自在師子、播三世覺母威德。雖ト別利於清涼山之雲、獲垂権迹於武州野露。

これは室町時代初期の長弁によるもので、正長二年(一四二九)とあり、文殊菩薩が武蔵国一宮の小野大明神として垂迹するという。時代は下るが、八幡神以外の垂迹に「垂権迹」が用いられた例として掲げた。

③①③④に例示したように、「垂権跡」は八幡神に限定された表現ではなく、垂迹として顕れた神々一般に用いられた。特に、縁起が円仁の事績を強調し、安然の記とされる記述を引用し、さらに作者を皇慶とするなど、天台宗寄りの内容を多く含むことを考えれば、③①③②のように山王信仰の文脈で用いられた「垂権跡」の表現が縁起に取り入れられたことも十分想定できる。

しかし同時に、八幡神の「得道来不動法性」の偈も、先に掲げた多くの例の通り、よく流布したものであった。「垂権跡」及び「垂権」の例は、圧倒的に八幡神関連の文献に多い。縁起撰述者の意識には、八幡神の偈文も存在したものと考えられる。

六、『江島縁起』と『天童山正覚寺観音菩薩縁起』

最後に、逗子市沼間の法勝寺に伝来した『天童山正覚寺観音菩薩縁起』に触れておきたい。

法勝寺は日蓮宗の寺院で、創建年代などの詳細は明らかでない。⁽²⁴⁾『天童山正覚寺観音菩薩縁起』は、延享元年(一七七四)記とする『法勝寺縁起』の後に、「古縁起之写」として記されたもので、その末尾には文安三年(一四四六)六月、沼間村正覚寺住持蓮進とある。

③⑤『法勝寺縁起』天童山正覚寺観音菩薩縁起

天童山正覚寺観音菩薩縁起

往昔、此所大沼而岸高、枯木交枝、□深碧水浸□、大蛇栖之、時々出西海辺、覆往来船、吐火吐毒、人民成害焉。于時人王四十五台聖武天皇御宇天平年中之頃、当国守護長尾左京大夫善応、奏聞国家之煩、人民歎切。然処釈行基法師赴此地、大夫善応請行基法師、踰踞恭敬、願大德垂哀愍、乞救人民之禍患而已。基師手自彫刻十一面観音菩薩、乘小船、掉沼読誦□□典。大蛇忽脱三熱苦患、還成衛護。基法師転沼、構小池、「一説云小沼」、令大蛇栖、益加教化耳。善応集国中人夫、枯木伐而埋沼、通川流名沼間里、成於地形。川上創建伽藍、依字号善応寺、奉崇彼観自在尊。大蛇祝諏防大明神、而於寺西北宮立、従人民安寧、無憂惱者、人貴敬不斜。(後略)

この地にはかつて大きな沼があつて大蛇が住み、時々海辺に出ては、船を転覆させたり火や毒を吐いて人を害していた。聖武天皇のころ、守護の長尾善応は行基に助けを求める。行基は十一面観音像を彫り、小船に乗って經典を誦する。すると大蛇は三熱の苦を逃れ、改心する。行基は沼を小さな池に変えて、大蛇を住まわせた。その後沼は埋め立てられて沼間の里となり、

行基の観音像を本尊として善応寺が建立された。大蛇は諏訪大明神として祀られることになる。観音像はその後感応院に祀られ、さらに正覚坊が寺を移して正覚寺とした。

③⑤を『江島縁起』と照らし合わせてみると、龍蛇を教化する存在や、教化の手段は大きく異なるが、かつて大きな湖沼があり、人を害する龍蛇が棲んでいたこと、龍蛇は時々湖の外へ出て人々に害をもたらしていたこと、そして龍蛇が教化されるのと同時に地形が変化することが共通する。どちらの縁起も、成立の背景や年代は明らかではないが、沼間と江の島は距離もそれほど離れていないことを考えると、互いに何らかの交渉があった可能性は考えられる。

なお、かつて龍口明神社の別当であった宝善院^{②⑥}にも、行基作とする十一面観音像が伝わる^{②⑦}。

③⑥『新編相模国風土記稿』巻一〇五 鎌倉郡之三十七・深沢庄

○宝善院 加持山靈山寺と号す「本寺記録には、泰澄山瑠璃光寺に作る」古義真言宗「手広村青蓮寺末」開山は泰澄「神護景雲元年三月十八日寂す」本尊は薬師なり「長一尺三寸九分、聖徳太子作」△鐘楼 △観音堂 十一面観音「長二尺五寸二分、行基作」を安ず。

宝善院については近世以前の記録が残っており、いつから存在したか、また周辺の寺社とどのような影響関係があったかは未詳である。しかし、少なくとも近世までに、行基と十一面観音に関する伝承が成立していたことは重要な情報である。

いずれにしても、江の島と逗子・沼間を含む地域一帯で、悪龍教化に関する伝承が共有され、『江島縁起』の成立にも影響を与えた可能性は十分に考えられよう^{②⑧}。なお、鎌倉の建長寺にも、蘭溪道隆と江の島弁才天の関係を示す伝承がある^{②⑨}。江の島・腰越のみならず、鎌倉を中心とした一帯における江の島弁才天の存在が大きなものであったことが窺える。

七、結び

小稿では、『江島縁起』真名本の冒頭部にあたる悪龍教化譚について、語

句・表現の典拠を検討した。

まず、五頭龍が国土に災害をもたらし、人に取り付いて乱逆を起こさせるという箇所には、『道賢上人冥途記』（日藏夢記）における太政威徳天、あるいはその使者の火雷火毒氣王が国中に災害をもたらす場面の文章と共通の表現が確認できる。類似するのは語句だけではない。『江島縁起』の五頭龍と『道賢上人冥途記』の太政威徳天は、はじめは悪心によつて人々に害をなすが、仏法により教化され、あるいは法樂を施与されて悪心を和らげ、善神として国家と人々に利益を与える存在に転じるという共通点を持つ。また『江島縁起』の悪龍教化譚以外の箇所にも、『道賢上人冥途記』と類似した表現が散見される。以上を考えると、『江島縁起』の撰述者は『道賢上人冥途記』を参照したと考えられる。

次に、『平家物語』からの引用や、『平家物語』と関連する表現が、冒頭だけでなく縁起の随所にみられることを指摘した。とくに、五頭龍が人食うことで悲しみ苦しむ人々の描写においては、『平家物語』剣巻における、八岐大蛇に関する記述からの引用がある。同時に『日本書紀』の八岐大蛇退治譚から引用したと考えられる表現もあることから、縁起の撰述者は五頭龍の姿を描くにあたり、五頭龍と同じく多頭の龍蛇であり、また子供たちを相次いで呑み食らってしまうという八岐大蛇のイメージを借りたことが想定される。さらに、縁起の文章においては、『平家物語』が引用する、白居易の新樂府「新豊折臂翁」の表現と、『平家物語』にしかない表現とが組み合わされている。このことから、『江島縁起』は、『平家物語』と「新豊折臂翁」とを同時に踏まえて撰述されたことがわかる。また、安徳天皇を八岐大蛇と結びつける『平家物語』の記述と共通する語句が縁起にあることも、縁起が八岐大蛇の伝承を踏まえつつ撰述されたことの傍証といえよう。白居易の詩についていえば、縁起には「長恨歌」を参照したと考えられる箇所もある。縁起撰述者は『白氏文集』を確実に参照し、これら以外にも多くの語彙を取り入れているものと推測できる。冒頭部末尾にみえる「垂権述」は、八幡神の偈文における用例が広く流布しているが、八幡に限らず様々な神に対して用いられた表現である。とりわけ山王信仰の文脈で用いられていたこと

は、縁起の成立に天台宗の僧が関わっていたと考えられることに照らして重要である。いずれにしても、弁才天は「権迹」たる天女の姿で江島明神として鎮座するのだという記述からは、仏・菩薩を神より優位に置く思想とともに、江島明神と呼ばれる神が、完全に弁才天そのものと捉えられていたわけではなかったことが窺える。

最後に、『天童山正覚寺観音菩薩縁起』と『江島縁起』の関連性を指摘した。『天童山正覚寺観音菩薩縁起』は、湖沼に悪龍が棲み、時に湖から出て災害をなし、やがて教化・調伏されるとともに土地の姿が変わるという点で、『江島縁起』と類似した性格を持つ。『江島縁起』『天童山正覚寺観音菩薩縁起』のどちらも、現状では詳細な成立年代や撰述者、先述された場が明らかでない。しかしこれらの資料は、江の島と逗子・沼間を含む地域一帯に、悪龍教化の伝承圏というべきものが存在していたことを示唆する。この伝承圏の中で『江島縁起』の悪龍教化譚も成立したのではないだろうか。

小稿では、これまで明確な典拠の指摘されてこなかった『江島縁起』冒頭の悪龍教化譚について、いくつかの典拠を明らかにすることができた。また、周辺地域一帯に共有された伝承が存在した可能性を指摘することができた。これらの成果をもつて、縁起の成立環境、そして江島縁起の全体像の解明に向けた一歩とすることができたものと考ええる。

「使用テキスト」 主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点等を私に改めた。

『江島縁起』 神道大系、『扶桑略記』『元亨釈書』 国史大系、『北野文叢』 北野神社社務所編『北野誌』、『本朝文粹』『土佐日記』『宝物集』 新日本古典文学大系、『日本書紀』 日本古典文学大系、『平家物語』 延慶本 延慶本註釈の会編『延慶本平家物語全註釈』、『平家物語』 長門本 麻原美子・小井土守敏・佐藤智広編『長門本平家物語』、『平家物語』 高野本 新編日本古典文学全集、『平家物語』 百二十句本 高橋貞一校訂『平家物語』 百二十句本、『源平盛衰記』 水原一考定『新定源平盛衰記』、『白氏文集』 新釈漢文大系、『諸寺縁起集』 大日本仏教全書、『八幡宇佐宮御託宣集』 重松明久校注訓訳『八幡宇佐宮御託宣集』、『江都督納言願文集』 吉原浩人編『古鈔本「江都督納言願文集」』、『山家要略記』 神宮文庫本 神道大系、『一遍聖絵』 長弁私案抄』 続群書類従、『太平記』 西源寺本 兵藤裕己校注『太平記』 (岩波文庫黄一四三)、『法勝寺縁起』 逗子市文化財調査報告書二、『新編相模国風土記稿』 大

日本地誌大系。

注

- (1) 江島神社蔵「相州得瑞島上之宮縁起」では采西。
- (2) 田中垂美「弁才天の悪龍教化と龍口明神―江島縁起説話の成立をめぐる―」『東洋の思想と宗教』第三八号、二〇二一・三。
- (3) 「霊地の起源伝承における「毒龍」の概念―「江島縁起」「菅根山縁起」を中心として―」、和漢比較文学学会第三十九回大会、口頭発表(二〇二〇・一〇・五) 一五、福島大学、オンライン開催。
- (4) 田中垂美「〔研究ノート〕江島縁起」の諸本と研究史」『アジアの文化と思想』第二九号、二〇二一・一。
- (5) ここでは中世以前のものを掲げる。
- (6) 呉文炳『江島考』(書物展望社、一九四一・一)。
- (7) 福島金治「鶴岡八幡宮の成立と鎌倉生源寺・江ノ島」(地方史研究協議会編『都市・近郊の信仰と遊山・観光―交流と変容』、雄山閣、一九九一・一〇)。
- (8) 鳥谷武史「中世における宇賀弁才天信仰の研究―叡山と「江島縁起」―」(博士論文、金沢大学(オンライン公開、二〇一七・三))。
- (9) 表記は適宜私に改めた。以下引用資料についても同様。
- (10) 旧龍口明神社の所在地は、現在も鎌倉市津の飛び地となっている。
- (11) 「道賢上人冥途記」については、山崎裕人「日藏蘇生説話について」、(中野猛編『説話と伝承と略縁起』(新典社研究叢書九四) 新典社、一九九六・五、山本五月「道賢上人冥途記」の成立―「北野文叢」所収永久寺本を中心に―」(『仏教文学』第二二号、一九九八・三)、今堀太逸「日本太政威徳天と災害―「道賢上人冥途記」の成立―」(大隅和雄編『文化史の構想』、吉川弘文館、二〇〇三・三)、竹井明男「道賢上人冥途記」・「日藏夢記」備考・史実との関係、ならびに登場人物、全体構成、表現の相違等をめぐって」(『人文学』第一七六号、二〇〇四・一二) など参照。
- (12) 一例として、縁起の「黒風払梢、白浪咽岸」は、三善道統「為三空也上人供養金字大般若経願文」(『本朝文粹』卷十三) の「白浪咽岸石之岸、相同「鷺池」」を踏まえた表現と考えられる。
- (13) 宝暦四年(一七五四)の序文を持つ地誌『江島大草子』(宮内庁書陵部所蔵)は長者塚について、「龍口山ノ東北山中ニアリ。今二塚ノ形ヲ存ス。彼長者カ十六人ノ子ヲ埋シ所ト云フ」とし、またその東南に「長者窪」があり、これについて「今ハ草ノミ茂レリ。昔長者カ住シ跡ナリト云フ」とする。また、五頭龍が初めて人を食った場所として縁起に見える「初瞰沢」についても、「長者カ窪ヨリ北ノ方十五六町ハカリ山ヲ行テ谷中ニ沢アリ。是ヲ云トナリ。今二人跡ノ稀ナル地ナリ」とする。さらに、これらの旧跡を記した地図を付している。
- (14) 「剣巻」及び八岐大蛇については、増田欣「平家物語と漢文学」(市古貞次編『諸

説一覽 平家物語、明治書院、一九七〇・六、伊藤正義「熱田の深秘―中世日本紀私注―」（『人文研究』三二巻第九号、一九七九・三）、同「続・熱田の深秘―資料『神祇官』―」（『人文研究』三四巻第四号、一九八二・三）↓日本文学研究資料刊行会編『お伽草子』、有精堂出版、一九八五・六所収、牧野和夫「延慶本『平家物語』の一考察―「諷誦」をめぐって―」（『軍記と語り物』第十六号、一九八〇・三）など参照。

- (15) 横井孝「延慶本平家物語における白氏文集の引用に関する覚書（下）」（『静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇』第四五巻、一九九五・三）。あわせて山口角鷹「本邦における新楽府の伝承（下限Ⅱ十五世紀中葉）」（『漢学研究』復刊第一号、一九六三・三）、増田欣「新楽府『新豊折臂翁』と平家物語―時長・光行合作説に関連して―」（『中世文芸』第四十号、一九六八・三）↓増田欣「中世文芸比較文学論考」、汲古書院、二〇〇二・二所収、牧野和夫「平家物語」漢故事の出版研究史」（山下宏明編『平家物語の生成』（軍記文学研究叢書五）、汲古書院、一九九七・六↓牧野和夫「延慶本『平家物語』の説話と学問」、思文閣、二〇〇五・一〇所収）、新聞一美「日本文学へ与えた白居易の影響に関する研究」（太田次男ほか編『日本における白居易の研究』（白居易研究講座七）、勉誠社、一九九八・八）など参照。

- (16) 小西徹龍「光長寺藏「山門奏状」について」（『古文書研究』第三十九号、一九九四・一〇）に翻刻。

- (17) 田中貴子「安徳天皇女性説の背景―女と子供の成仏をめぐって―」（『日本文学』五一巻第七号、二〇〇二・七）、小林加代子「覚一本『平家物語』安徳天皇入水記事が示すもの―厳島明神を介して、竜女、そして文殊菩薩へ―」（『同志社国文学』第八一号、二〇一四・一一）参照。

- (18) 「愚管抄」には八岐大蛇の名はみえず、安徳天皇が、龍王の娘である厳島明神の申し子であるとされ、龍宮に剣が還ったのだとする。

- (19) 「権迹」の用例は『法華玄義』巻七上「大正三三・七六五頁中」・『涅槃経義記』巻一「大正三七・六三三頁上」・『高僧伝』巻一・安清「大正五〇・三二四頁上」などに、「権迹」は梁簡文帝「菩提樹頌」（『弘明集』巻十五）「大正五二・二〇四頁上」などに見える。

- (20) 吉原浩人「八幡宇佐宮御託宣集」と『法華経』（『国文学 解釈と鑑賞』六二号第三巻、一九九七・三）。

- (21) 大江匡房の天神信仰については、吉原浩人「王子晋・羊太傳への追慕と天神の感応―『江談抄』巻六第九話をめぐって―」（『説話文学研究』二九号、一九九四・六）、同「説話文学に見る菅原道真―『江談抄』と天神縁起の形成」（『国文学 解釈と鑑賞』第六七巻四号、二〇〇二・四）など参照。

- (22) 『山家要略記』については、野本覚成「山家要略記」の全体像」（『天台学报』二五号、一九八三・一一）、同「山家要略記」の性格」（『壬生台舜博士頌寿記念論文

集刊行会編『仏教の歴史と思想…壬生台舜博士頌寿記念』、大蔵出版、一九八五・二）、佐藤真人「伝大江匡房撰『扶桑明月集』について」（『同前』、菅原信海『山王神道の研究』、春秋社、一九九二・二など参照。

- (23) ここでは、一例として古本のひとつである西源寺本を掲げた。『太平記』諸本については、長坂成行「伝存太平記写本総覧」、和泉書院、二〇〇八・九、同「太平記」諸本研究の軌跡と課題―一九九〇年代以降を中心に―」（松尾葦江編『平和の世は来るか―太平記』（軍記物語講座第三巻）花鳥社、二〇一九・一一）など、西源院本については伊藤裕己「『太平記』の本文」（兵藤裕己校注『太平記』四（岩波文庫）、岩波書店、二〇一五・一〇）など参照。

- (24) 「新編相模国風土記稿」には「号沼間山、日蓮宗金谷村大明寺末、本尊三宝及十一面観音、行基作、長二尺五寸」とある。

- (25) 「法勝寺縁起」については、伊藤一美「東国の「開墾伝承」の一考察 逗子沼間・池子地域の伝承縁起と開発について」（安田元久先生退任記念論集刊行委員会編『中世日本の諸相』下巻、吉川弘文館、一九八九・四）参照。

- (26) 「江島大草子」龍口山の条に、「山ノ尾上二南ニ向テ神祠ヲ立ツ、是ヲ龍口大明神ト称ス。毎年九月九日ニ祭礼アリ、別当ハ津村ノ宝善院ナリ」とある。

- (27) 「江島縁起」において、龍口明神に法楽を施し、託宣を受けるのが泰澄であることと、近世に龍口明神の別当であった宝善院が、開山を泰澄と伝え泰澄山の山号を称することには、何らかの関係があったとするのが自然であろう。先掲注(2)参照。

- (28) 江の島および「江島縁起」と宝善院は泰澄で、宝善院と「天童山正覚寺観音菩薩縁起」は行基及び行基作の十一面観音という要素で結びつくが、江の島には行基に関する伝承が確認できない。なお、「江島縁起」に引用される「安然和尚の記」において江の島と対置される竹生島は、行基を開基として伝える。

- (29) 伊藤聡「頼朝之最期」における弁才天本身顕現譚をめぐって」（『説話と説話文学の会編』『説話論集』第一六集、清文堂、二〇〇七・七）。

【付記】

小稿は、説話文学会二〇二二年度大会における口頭発表「『江島縁起』における典拠表現―悪龍調伏譚を中心に―」（二〇二二・六・二七、青山学院大学（オンライン開催））の内容の一部をもとに成稿したものである。

Sourced Expressions in the Tale of the Indoctrinating Dragon of the Enoshima-Engi

Ami TANAKA

Abstract

This study examines the sources of the words and expressions used in the tale of the indoctrinating evil dragon of the Enoshima-Engi.

First, the passage where the five-headed dragon brings disasters shares common expressions with the Dōken Shōnin Meidoki, where the Daijō-Itokuten and his attendants bring disasters. The similarity is not only in terms of the wording. The dragon and Daijō-Itokuten have in common that they are taught by Buddhism and eased their evil intentions, so they turn into good deities. In addition, the other parts of the Enoshima-Engi contain expressions similar to those in the Dōken Shōnin Meidoki. Considering the above, the compiler of the Enoshima-Engi is thought to have referred to the Dōken Shōnin Meidoki.

Next, the quotations and expressions related to Heike-Monogatari are found throughout Enoshima-Engi. In particular, in the description of the grieving people, there is a quotation from the description of the Yamata-no-Orochi in Heike-Monogatari. Furthermore, in the text of Enoshima-Engi, there is a combination of the expression in Xinfeng Zhe Bi Weng by Bai Juyi, which is quoted by Heike-Monogatari, and an expression that is unique to Heike-Monogatari.

The phrase “Gonjaku wo taru” was used for various deities, especially the Hachiman. Its use in the literature of the Sannō Shintō is particularly important in light of the association with the Tendai sect. The description of Enoshima-Myōjin in the form of a heavenly maiden, as “Gonjaku,” suggests that Enoshima-Myōjin was not completely regarded as Benzaiten itself, as well as the idea that Buddhas and Bodhisattvas are superior to deities.

Finally, the connection between the “Tendōsan Shōgakuji Kannon Bosatsu Engi” and Enoshima-Engi is highlighted. The two share a similarity in that an evil dragon living in a lake is indoctrinated, and the appearance of the land is also changed.

It is suggested that dragon lore existed in the area centered on Enoshima, Zushi, and Numama, and it is likely that Enoshima-Engi was established within this tradition.